小児慢性肝炎の経過

矢野右人，　松村暢之

要約：　２年以上観察し得た15歳未満の慢性肝炎患者21例につき、経過と予後を検討した。Ｂ型肝炎では頻度は少ないが、自然観察例においても治癒率が高く、肝硬変進展例もなく、予後良好であった。非Ａ非Ｂ型肝炎の頻度は稀であった。

見出し語：　小児慢性肝炎

15歳未満で２年以上経過観察できた慢性肝炎患者21例につき、経過と予後を検討した。

＜Ｂ型慢性肝炎＞

本院における初診時Ｂ型慢性肝炎患者 407例中、15歳未満は21例（ 5.2%）であり、20歳代（30.7%）、30歳代（29.0%）に比し頻度は低いと考えられた。21例中、２年以上経過観察し得た症例は19例であったが、デルタ感染を確認し、14歳で肝硬変となり15歳で死亡した１例を除くと、６～14歳の男子15例、女子３例であった。家族歴では母親の HBsAgは６例に陽性であり、６例中５例が同胞にも HBsAg陽性者を認めた。治療は18例中14例にステロイド離脱療法を施行し、５例は自然観察例であった。予後は18例中14例（83.3%）に肝機能正常１年以上の臨床的治癒を認め、３例は現在も肝機能変動中であるが、肝硬変進展例は１例も認められていない。ステロイド離脱療法施行例では14例中12例（85.7%）が治癒しており、自然経過観察例でも４例中３例（75%）が治癒していた。また、自然経過で治癒した例でのtransami- naseやウイルスマーカーの推移を検討すると、ステロイド離脱療法と同じく急性再燃後に肝機能正常化、seroconversionしており、免疫賦活を利用したステロイド離脱療法に似た強い免疫応答

国立長崎中央病院　臨床研究部

が起こり治癒したと考えられた。以上より、小児におけるＢ型慢性肝炎は、頻度は高くないが自然観察例においても、小児期は成人に比し免疫応答が強く、ウイルスの排除も可能であり、治癒率が高く、一般に予後良好であると考えられた。

＜非Ａ非Ｂ型慢性肝炎＞

本院における１年以上経過観察し得た 147 例の非Ａ非Ｂ型慢性肝炎患者のうち、15歳未満は２例（ 1.4%）であり、小児の非Ａ非Ｂ型慢性肝炎は非常に稀であると考えられた。うち１例は輸血歴があり、急性肝炎を確認しており、ＨＣＶ抗体も強陽性（c.o.v 6.5 以上）であった。同症例に対しＩＦＮ療法を施行し、ＨＣＶ抗体価は著明に低下（投与前 759ＮＵ→投与後６カ月 178ＮＵ）し、肝機能もすべて正常化を持続している。この事は一般に難治性と言われる同肝炎において、小児では治療により予後良好の存在を示唆している。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:2 年以上観察し得た 15 歳未満の慢性肝炎患者 21 例につき、経過と予後を検討した。B 型肝炎では頻度は少ないが、自然観察例においても治癒率が高く、肝硬変進展例もなく、予後良好であった。非 A 非 B 型肝炎の頻度は稀であった。